

として参加されたが、その時に北海の海に水没、戦死された。

吹雪 ルチャル原の吹雪

猛吹雪のつづく毎日択捉島の海岸に我々の部隊は天幕を張り、そこに生活し沖の船からの荷物の陸揚の作業がつづいた。小型陸揚舟と陸に渡した板から荷物もろとも海に落ちてみずぐ陸に這い上れば海水は服に浸み込むまいに氷の珠になってしまうそんな寒さであった。我々兵隊が生活する天幕舎は休むことなく吹き荒れる吹雪で全く雪の中に埋もれた。数日後に金子二等兵にも不寝番の当番がまわってきた。雪の中に埋れた中隊の数個の天幕を巡回するのが任務だった。

自分の入っていた天幕を出て銃を片手で頭の上に差し揚げ、いま一方の手で身長以上に積った雪をラッセルして進む。追い風で猛吹雪はうしろから吹きつける。何とか各天幕舎を巡回し戻ろうとして後を振りかえると今ラッセルして来た跡は吹雪で完全になくなっていて。前方から吹く向い風で方向を見失い、感をたよりに雪をこぎ分けてすすむ。帰る自分の天幕舎を見失い寒さと吹きつける吹雪の中で立ったまま途方にくれた。その時、「不寝番、不寝番」と呼ぶ声が右の方向にきこえた。その声に勇づけられ声のした方向に雪を分けてすすむ。さがす天幕舎はない。耳をうたがい反転して左の方向にすすみはじめたら、又不寝番と呼ぶ声が右の方向にきこえた。よろこび勇気をふるってその声の聞こえた方にすすむ。天の助け、めざす天幕舎があった。

命びろいした。母が千葉県成田の不動様に月まいりし、お百度をふんで頂いたお守り様が割れていた。私はいまでも毎年成田のお不動様におまいりを続けている。

択捉島の短かい春夏

台上の歩哨

択捉島の桜前線がくるのは7月中旬。吹雪の島にもおそい春と夏がいっしょに来る。この島も北海道北辺の利尻島礼文島と同じ北緯45度くらいと思う七月の礼文島は花の浮島。択捉島でも高山植物がいっせいに開き百花咲き乱れる。

太平洋を望む台上で歩哨の任務につく。足もとは一面に芝いっぱい。頭の上の空で鷺が輪を描いて舞い、目の前の海上を浮き沈みして逃げる鯨を追いかけて鯨の大群が海面に跳び上る。長い長い海岸線の砂浜に無数のトドがねむそうにころがっている。長いコンブが幾筋もどこまでもどこまでも延びている。

嵐の海、吹雪の択捉も夢のような季節だ。短い、短い、春夏の期間だ。

産物 世界の三大漁業地

「にしんきたかと鰯にきけば私しゅ発つ鳥波に聞け」ソーラン節の一句だ。鯨の大群が来ると雄魚のだす白子で大海原の海面が広く一面に白く濁ると聞いている。千島の海は世界の三大漁業地だと教えられている。千島の海は魚類、蟹、ウニ、コンブ、海獣、海産物の宝庫だ。季節になると択捉島の川にも鮭が産卵のために上って来る。重りあって上って来る鮭の間に棒をたてると、しばらくの間鮭の群にはさまれてその棒は倒れない。私が勤務した炊事場の側の沼にもそこから流れる川

に鮭の大群が上って来る。冬になると北海道に帰る孵化場の漁師達が沼に綱を引き、引上げた大変の数の鮭が逃げないように頭の急所を棒で叩いてゆくと、後につづ漁師が卵だけ入物に採って引上げてゆく累累たる鮭にすかさず飛んで来たどう猛な色丹鳥の群がたちまちきれいにたいらげてしまう。海岸では我々のスキーのストックでいくらでも大きな蟹がとれる。部隊長の命令で、主食の米は将来に備えて食いのぼし、貯蔵せよ、その代食は鮭又は蟹にせよ、1匹ものの鮭を竹竿にさして火で焼いて食う。蟹飯は一度食うと鼻につく。いっぺんで食欲はなくなる。鮭や蟹は金を払って切身を味ってこそうまい。千島の魚や海産物は日本の宝だ。

ソ連に騙し取られた北方領土 スーラダモイ東京

昭和20年8月15日終戦をむかえた8月の末、ソ連の兵隊が少数で恐る恐る上陸して来た。そして我々に、君達はスコー東京ダモイ、すぐ日本に帰す、君達が帰る日本の本土は永い戦争で全く疲弊のどん底で、着る物、食物は全くない。君達の兵器はソ連に引渡し、その他食糧や衣類は全て日本に持ちかえり、本土の親兄弟を助けてやって欲しい。急ぎ全員で君達が山の奥深く置き貯蔵しているものを、君達が帰る船にすぐ積み込まれるよう山奥から持出して集積して欲しい。我々は一変に彼等に対する敵愾心はからりと晴れ、ソ連の温い情に感激した。

択捉島に上陸以来、毎日夜を日について、兵隊1人日当り米俵1俵外にカンパンの箱程度1個を責任量として川を渡り、崖をよじ登り、死ぬおもいで苦痛に耐えて山奥に集積した兵器食糧被服を、本土に帰れる嬉しさに、その重労働をものともせず海岸に集めてその作業を完了した。

いよいよ我々に本土帰国の乗船命令がきた。彼等は又我々に貴方の帰りを待っている故郷の父母兄弟姉妹に貴方が持てるだけの被服そして甘味品を持ち帰って喜ばせてやって下さいと、我々は生きて故郷に帰れる嬉しさ、喉から手が出る程ほしい、キャラメル、練ミルクを持てるだけ持ち、欲も手助け身につけられるだけの被服を身につけて、船に乗れば明日にでも会える肉親に思いをはせて、歩きに歩いて、つんねい港（連合艦隊がハワイ攻撃に向う時の全艦隊の集結港）に着いた。我々を乗せる大きな船が待っていた。沸き上がる感激を胸いっぱい、大勢の兵隊が港の広場に並ぶ。

ソ連としては限られた船で一時も早く1人でも多くの兵隊を日本に帰したい。限られた船倉に兵隊1人で多くの荷物を持ち込めば3人乗れるところ1人か1人半しか入れない。ソ連は君等を一刻も早く1人でも多く君達を日本に帰国させたいと思う。ソ連の意向を理解してほしい。それで兵隊1人当り雑糞¹⁰に入る程度の日用品外に外套（夏物か又は冬物）だけ持ち込んでよろしいと。

急な変更¹¹に不審に思ったが、1人でも多く帰したいという実状を現解し、折角汗を流して持って来た品物を後髪をひかれる思いで、広場の1ヶ所に持参品を山と積んで、用意された輸送船に何の不審もいдаかず乗船した。明日でも会える肉身の顔、なつかしい故郷の山川に思いを走せて皆が広い甲板を自由に歩きまわった一夜明けて船は北海道の稚内港でなく樺太の大泊港に着いた。連絡事項を受領に将校全員が下船した。約一時間くらいで将校は又乗船して来た。不思議に下船前まで軍